

令和元年 10 月 25 日 市長定例記者会見 会見録

【司会】

先ほど、ご案内しましたとおり、本日もライブ配信で行っております。

本日の話題は 1 件です。市長、さっそくお願いいたします。

【市長】

はい、今日はこの話題から報告をしなければならないと思います。1月の22日、ご存知のとおり、即位礼正殿の儀に、静岡市を代表して皇居に参内をしましてまいりました。テレビで皆さんもご覧になったかと思いますが、荘厳な儀式でありました。地方自治体からは都道府県知事とそれぞれの議会の議長、そして、政令指定都市の20人の市長とそれぞれの市議会議長のみが地方公共団体の代表として、豊明殿に参内をさせていただきました。

残念なことには、遠藤市議会議長、今、姉妹都市のストックトンに団長として訪問中で、案内状が来ていたんだけど行けなくて、静岡市からは私一人の参内だったということなので、本当に荘厳な気持ちに、私自身、なりました。

一番嬉しかったのが、国連加盟国が193カ国で日本が国家承認している195か国の90%以上の180数カ国が、何らかの代表をこの即位礼正殿の儀に派遣をしたということであります。まさに、いろんな今までの日本の歴史がありましたけれども、世界と繋がれた日本なんだな、それが私たちのアジア、極東の日本という国が、今ここまで到達しているんだなということを、私はすごく嬉しいなというふうに思いました。

平成の初めの時よりも多い参加国の代表だということです。ますます日本は国際化していかなくやいけないし、国際社会の中で責任を果たしていかなくやいけないということに思いを新たにし、そのチーム日本の一員である静岡市もそこに挑戦をしていきたいからこそ、多文化共生社会を作っていくなければいけないだろうなというふうに思いました。

一方、ラグビーワールドカップ南アフリカ戦は残念でしたけど、よく(ベスト)8までいったというふうに皆さんも拍手を贈りたい気持ちだろうと思います。今回の日本の強さ、これはやっぱりダイバーシティだと思いませんか。色んなバックグラウンドを持った、肌の色の違い、言語の違いを乗り越えてワンチームになったからこそ、これだけ桜の戦士、世界レベルで戦えた。だから、いろんなバックグラウンドが集まるということは強くなるんですよね。地域社会、静岡市も同じだろうと思います。いろんなバックグラウンドを持った、そんな市民がそれぞれの個性と役割をふんだんに発揮するというのが、静岡市というのが強い地域社会になるということ、私は感じました。

ですので、9月に多文化共生センターを設置したというのも、その一環でありますし、今日の話題、障がいのある方もない方もそれぞれ静岡市民である以上、一人ひとりの市民が輝いてほしいという流れの中で、こんな舞台を今回、提供することになったということが今日の話題であります。

自分の可能性を100%活かすことのできる共生社会の実現を目指してというタイトルであります。

お手元に配付の資料がありますので、これをご覧いただきたいなと思います。「ファンキー ノー ボーダーズ」という名前がいいでしょう。ファンキーっていうのは「イカしている」とかね、素晴らしいとか、そういう意味ですけどもイカした名前ですよね。関係ないんだと。障がいのあるなしは関係ないんだと。それを体現するような「ファンキー ノー ボーダーズ」というチームが、11月の2日と3日に静岡市民文化会館で上演される舞台、お手元の配付資料のチラシ、「Shine a Light」のオープニングアクトを務めます。

これはご存知のとおり、3次総の5大構想の「まちは劇場の推進」というところの一環であります。ですから、大道芸ワールドカップにぶつけてあります。大道芸ワールドカップで世界中の方々に静岡にお越しをいただいている中で、こういうハンディキャップを持った市民の皆さんも、自分たちの個性を生かして演劇をしているんだよということもアピールをしていきたいと思っています。

男性演劇チーム「エイトビート」、女性演劇チーム「ハイポジション」に続く、静岡市民による完全オリジナル舞台作品を作り、発信していこうという試みであります。これは静岡市と外郭の市文化振興財団の共同プロジェクト、「ラウドヒル計画」から今年誕生した障がい者演劇チーム「ファンキー ノー ボーダーズ」です。

「ラウドヒル計画」もベテランの記者の方はご存知だと思いますけれども、静岡、もつともつと声を出せ、もつともつと情報発信しろ、おとなしいままじゃだめだぞ、奥ゆかしいだけじゃだめだぞ、「quiet hill」じゃだめだぞ、「静かな丘」じゃダメだぞ、大きな声を出した丘になれというのが、「quiet hill」が静岡ならば、ラウドヒル計画からですね。つまり、大きな声を出して静岡市をアピールしろ、首都圏に世界に対して、シティプロモーションをしろ、情報発信をしろと。そういう思いのこもった「ラウドヒル計画」です。

来年、2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックでは、3つのコンセプトを掲げ、そのうちの1つが「多様性と調和」であります。人種や肌の色、性別や言語、そして障がいの有無などあらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合う。つまり、多様性と調和の重要性を改めて認識し、共生社会を育むことが重要であることを人々に訴えかけています。

私たちの「まちは劇場」のコンセプトも、まさにオリパラの、このコンセプトと一緒に、つまり、ダイバーシティとハーモニーなわけですね。「令和」を英語に訳すと「beautiful harmony」と公式に定められました。ハーモニーというのはホモジニアスな社会では、わりと保ちやすいんですけども、いろんなタイプの個性がいる中で共生をするというのは、ハードルが上がります。

ダイバーシティの中のハーモニーというのはすごく難しい。しかし、このダイバーシティとハーモニーをこれからは両立していかなければ成熟した国家にはならないんだよと。そういうことを令和の時代には問題意識として持っていなきやいけないなというふうに思いました。

「ファンキー ノー ボーダーズ」は、障がいがありながら舞台上で自己表現をしたいと自らから手を挙げた方10名と、ラウドヒル計画有志のメンバー10名からなる演劇チームであります。チームの皆さんは舞台経験のある方もいれば、舞台やダンスなんて全く初めてという方もいます。オリンピック・パラリンピックイヤーでのオリジナル作品を、来年、公演しますが、それに向け一生懸命稽古に励んでいます。

そのオープニングアクトが、来月始まるということでもあります。具体的には単に用意されたシナリオを演じるのではなく、自分の可能性、自分をどう表現するかを探しながらオリジナルの舞台作品を作り上げていくというワークショップ形式の稽古を積んでおります。そして、これまでの稽古の成果の発表の場、そして、申し上げましたとおり、来年の本番公演に向けたプレ公演として、今回、「Shine a Light」のオープニングアクトを務めることとなりました。

このオープニングアクトの内容は、たぶん皆さんが想像する内容とは異なっているでしょう。メンバーは老若男女、様々ですがそれぞれの本音トーク、障がい者としての本音トークが炸裂します。健全者と比べて何々ができないということでは決してなく、彼らの個性が全く違ったシーンを作り出しています。ご期待ください。

それでは、僕がどんなに口で言ってもビジュアルで実際の稽古の様子を見てもらった方が感じてもらえると思いますし、じゃあ行ってみようかな、取材をしてみようかなと感じてもらえますので、今日、広報課が稽古の様子を撮ってきてもらいました。動画をここで流したいと思いますので、私も初めて見ますけど、よろしく願います。

(稽古の様子の映像)

せめて市の職員から拍手なんかもらえると・・・

(拍手)

まばらな拍手をおそれいます。皆さん、どんどんレベルが上がり、彼ら自身が表現者として自信に満ちて実に生き活きとしていないでしょうか。今後は 10 月 26 日と 27 日に稽古を行う予定ですので、ぜひ記者の皆さんには取材をしていただきたいとお願いをいたします。

「まちは劇場の推進」という5大構想の一環として進める、この事業のことを多くの市民の皆さん、市民だけじゃないですね、市内外の皆さんに知っていただくことにより、障がいのある人もない人もあらゆる人々が芸術、文化、スポーツなどに取り組むことへの後押しに繋がり、誰もが自分の可能性を 100%活かすことのできる多文化共生社会が実現することを期待しています。以上です。

【司会】

それではただいまの発表項目につきまして、ご質問がある方はお願いしたいと思いますが、ご質問の際は社名とお名前をおっしゃってからお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

はい、NHK さん。

【NHK】

NHK です。市長、そのダイバーシティとハーモニー両立ということについて、たいへん心強いと思う反面ですね、私、そういった言葉をですね、ちょっと苦々しく聞こえてしまうところが、ちょっと心中にあったのですけれども、おっしゃるとおり、いろんなバックグラウンドがある人がいる社会が、強くなるというのはそのとおりだと思うんですが、では市長は、すいません、この劇場の話とは離れて恐縮ですけれども、インクルーシブ教育について、どのようにお考えになっているのかを尋ねておきたいんですが、現に今、静岡市内である小学生の子がですね、親御さんと一緒に静岡市立の小学校に

行きたいよと要望しているのに、教育委員会側が障がいがあるからダメですと。受け入れませんと。特別支援学校に行ってくださいという案件が起きているわけですね。市長、ご存知かどうかわかりませんが、

そういったことが足元で起きている中でそれを事態打開に何か、市長、お考えになることがないのかどうか。文部科学省も学校看護師を配置するんだったら財政的補助をしますよと。この数年、そういう施策を打ち出しているのに、就学にあたっては親御さんとその子の要望を最大限取り入れてください、平成 25 年から方針転換をしているのに、そういうことが静岡市で起きていることを、まずご承知かどうか、それについてどう思われているか、お聞かせいただけますでしょうか。

【市長】

ご質問いただきありがとうございます。私たちが情報発信する話題について質問いただけるというのは、たいへんありがたいなというふうに思います。その質問にできるだけ誠実にお答えをさせていただきますと、もちろん私は承知をしております。やはり、こういうトップの、一つのシンボリックな事業をやると同時に、社会全体、富士山のように裾野の広い、此処こそ、そういうインクルーシブな制度であるとか、空気であるとか、そういったものを醸成していかなければならないという問題意識を、私は持っております。

とりわけ教育の現場では大事です。おそらく記者の個人的な経験の中で、今、まだそこまで追いついていないんじゃないかと。社会全体がそうなっていないんじゃないかというような気持ちがあるのはよくわかります。ですから、私もそこに何とか寄り添っていきたいというふうに思っているからこそ、今年度の総合教育会議のテーマを、市長部局の方から特別支援教育に設定をしようと呼びかけて議論を重ねてきたつもりです。

それに向けて先日取りまとめの総合教育会議が開かれました。ここでの結論というのは教育委員の6人の皆さんと、副市長も交えての市長部局との議論で決めたことであり、現場の特別支援教育に一生懸命頑張っている先生方、プロジェクトチームを作って、なるべく生の声を生かした提案を頂きましたので、これを令和2年度の教育予算の中に反映をさせていただきたいというふうに思っております。

世界に輝く静岡市もそうだし、ソーシャルインクルージョンもそうです。千里の道も一歩から着実にその歩みを歩んでいきたいと思っておりますし、それこそが私がよく言う世界水準の都市、ワールドクラスの自治体の要件だろうと思っております。ぜひ頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

【司会】

発表項目についての質問ということでお願いしたいと思っております。

【NHK】

重要なことだと思っております。このテーマを考える上でも。だめでしょうか、市長、この質問。

【市長】

大事です、大事です。どうぞ。

【NHK】

そのような大きな話を、総合教育とか、予算づけとか、それはよろしいことだと思いますが、今、足元で起きている、この静岡市立の学校に通いたいよという保護者、子どもの希望を受け入れるかどうかについて、何か市長、リーダーシップを取れることはないのでしょうか。

【市長】

うん。わかりました。教育委員会、今日は来ていますか。

わかりました。それは教育長に伝えますし、そういう議論を始めていますので、私の思いはあります。

【NHK】

わかりました。ありがとうございます。

【司会】

他にいかがでしょうか。はい、ありがとうございます。

それでは、幹事社質問に移りますので、幹事社さん、よろしく願いいたします。

【時事通信】

幹事社の時事通信社です。台風 19 号で静岡市の駿河区の西島と下島や、清水区で道路の冠水が見られました。昨日は関連死の発表もあったと思うんですけれども、今までの対策への評価とポンプの設置など今後予定している対策があればお願いします。また、今回は入管庁などが英語で台風警戒を呼びかけするなど外国人への周知に努めていました。来年オリンピック・パラリンピックを迎える中で、静岡市には在住外国人だけでなく、外国人の観光客も増えると予想されますが、災害情報を周知するための具体的な施策があればお聞かせください。

【市長】

はい、大きく2つ質問をいただきました。まず1つ目の今までの対策への評価と今後の予定している対策についてであります。これは全国レベルの喫緊の行政課題だというふうに理解をしております。気候変動、地球温暖化の解決が待ったなしで、災害対策もそれに対応した次のフェイズで考えなければいけないという認識を新たにされたのが、今回の台風 19 号だろうと思います。

全国レベルで高潮が原因で想定以上に被害が拡大してしまいました。静岡市内で最も大きな被害を被ったのはご存知のとおり駿河区の西島、下島地区であります。今まで市が管理するポンプ施設を1日の雨量が 262mm、この雨には耐えられるような設計だったんですね。それは正常に今回も稼働しておりました。ただ今回、それを上回る 411mm の雨が振ってしまいました。これは

1/100と言いますが、概ね、想定値とすると100年に一度来るという降雨量なわけであります。ですので、今までの整備基準が262mm相当の降雨に耐えられるという設計ですので、その整備水準を越えてしまって施設の排水能力が追いつかなかったということが冠水の原因であります。

なので、2つ目の質問に入るわけですがけれども、今後の対策が大事だろうと思います。国交省全体もね、その意識を共有してくれております。水防災意識社会を作らなきゃいけないというスローガンがありますのでね、私たちも、もちろんポンプ能力の向上をはじめ、県や国との行政機関、連携としての問題意識の共有、そんな対策をこれも令和2年度の予算編成に向けてしていきたいなというふうに思っています。以上です。

【司会】

市長、外国人の方の・・・

【市長】

そうだ、そうだ。実は今週の初めね、これ余談ですけども、私の松下政経塾時代の同期が初めて入閣したんですよ。法務大臣の河井氏なんですけれども、その祝う会を同期でやりましたね。で、大臣室まで行ってきて、このことが我々すごく課題だと。で、私の同期に福井県の越前市長もいるもんですから、やっぱり多文化共生社会、先刻の話題ですね、を下支えするのにやっぱりこの入管法の改正により、外国人が地方都市にも入ってくるのに、どう対応するかというのはすごい大事だよということを提言してきました。そうすると入管庁は新しくできた組織で、まだまだこれからというふうに、彼らは謙虚におっしゃっていましたが、やらなきゃいけないし、地方自治体との連携をしなければいけないという強い意識は持っていておりました。

そこで、まず私たちができることから始めよう、静岡市としてはピクトグラムですね。避難所等の案内標識や避難誘導の標識など、特定の言語に頼らなくても理解できるピクトグラム、絵文字による表示を活用していきます。とりわけ沿岸部等々、観光客の多い場所では日本語に加えて英語、中国語、韓国語、ポルトガル語の5カ国語による多言語表示の看板も設置しております。

訪日外国人旅行者の方々への情報提供については、JR静岡駅にある総合観光案内所にて観光庁作成のリーフレット、「Safety Information カード」というものを配布しております。

一方、避難勧告などの緊急情報については、同じく観光庁監修の外国人旅行者向け災害時の情報提供アプリ、これは「Safety tips」と言いますが、これを用いて情報提供しております。

災害が万が一発生をした時には、位置情報を元に静岡市を訪問している旅行者の方々に災害の情報を一方的にね、プッシュ配信できる体制を整えております。このアプリについては「Safety information カード」にも掲載をされておりますので、まずはこのカードを入手してもらいたいという啓発活動も進めてまいります。

また、観光交流文化局とね、国際交流協会がタイアップをしながら、年に一度でありますけれども防災セミナー、外国人向けの防災セミナーも開催をしております。まだ緒に就いたばかりですけどもね、そういう対応していきたいなと思っています。以上です。

【司会】

よろしいですか。はい、ありがとうございました。それでは、各社さんからのご質問をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。静岡朝日テレビさん。

【静岡朝日テレビ】

静岡朝日テレビです。先週の木曜日なんですけれども、清水庁舎の移転のための条例案が可決されたことについての川勝知事の発言で、市長が市議会の有力ボスの顔色を伺って、市議会に従属する形になっていると。市長が市民から乖離している結果が今回の裁決だというような発言をされました。これについて、市長と市議会の関係が不健全だという批判をされたということだと思いますけれども、これについての、まず市長の受け止めをお聞かせ願いたいんですけれども。

【市長】

昨日、夜遅く新幹線で静岡駅に戻ってきたら、新幹線の改札のところね、とびっきりの伊地さんの顔がドカーンと大きなポスターで張り替えられててね、ああ、明日記者会見でそんな質問が出るのかなというふうに思っていました。私たちは議会制民主主義のルールに基づいて様々な会派にたっぷりな時間を提供した議会運営をしてくださったと、議会運営委員会に敬意を表しております。その結果、重い議決をいただいたというのが行政の立場でありますので、私たちはこれからこの重い議決を自戒をしながら、丁寧な説明をこれからもしつつ、この事業を前に進めてまいりたいと思っています。以上です。

【静岡朝日テレビ】

そうすると、川勝知事の批判に対して、全く事実無根であるし、根拠はないということなんでしょうか。

【市長】

付け加えるのならば、知事の発言というのはとても重いものでありますので、言葉を発する前に、その現場の状況ということに思いを馳せていただいて、発言をしていただければありがたいなというふうに思っています。

【司会】

よろしいですか。はい、ありがとうございます。他にいかがでしょうか。はい、NHKさん。

【NHK】

たびたびすみません、NHKです。今のご質問に関連して、現場の状況というのは何を指してらっしゃいますか。現場の状況に思いを馳せてとおっしゃいましたが。

【市長】

市議会の議論ですね。

【NHK】

市議会の議論が現場であるということ？

【市長】

私にとっての現場っていう意味で、あの、別に他意はないんですけども。この市政の現場というふうに言った方がいいんでしょうか。それでよろしいでしょうか。

【NHK】

はい、わかりました。

【市長】

やっぱり、市政はね、やっぱり市政ですからね。やっぱり市政の現場は政令指定都市として、与えられた権限・財源の中で、私たちがなるべく責任を持って、やはり法に則った議会運営をして、重い議決をいただいたということなのでね、そういう観点から、市政の現場を重んじていただきたいという意味であります。そういうふうに法的にもね、今は枠組みがありますよね。2000年の地方分権一括法でね。

【NHK】

はい、わかりました。関連して、ちょっと私も気になっているんですけども、この庁舎移転についてですね、市長を支持するお立場の会派の議員さんの間でも、どうしてこんなにうまく理解が広まらないんだろうと。

【市長】

理解がなんですか？

【NHK】

理解が広まらないんだろうと。2年後の自分たちの市議会議員選挙にも影響しかねないと。場合によっては4年後の選挙の対応も、場合によってはどうか、もう、そこからちゃんと考えておかないと持たないという見方をされる方もいらっしゃるんですけど、こういった市長を支持する議員さん達に非常に負担をかけていらっしゃる、ご苦勞をかけていらっしゃる状況を、これ執行部批判的に議員さん、仰る方もいらっしゃるんですけども、どう受け止めていらっしゃるか。

【市長】

私自身も先ほども申し上げましたとおり、丁寧に、丁寧に説明をしていきたいと思っています。議会で私が申し上げましたとおり、もう考えに考えて清水の 10 年後、20 年後、30 年後の姿を思い描きながら、高齢化の観点、経済の活性化の観点、交通政策の観点、コンパクトシティという観点、そして、もちろん防災の観点、それを勘案して、よし、こうしようという一つの方向性でありますし、また、一自治区だけではなくて、120 周年に間に合って発表したグランドデザイン、これは 2040 年にこういう姿の清水のまちを目指したいという、このグランドデザインのリーディングプロジェクトの1つの事業ですので、全体の中で私たちに与えられた責任として、この事業、庁舎の移転と海洋文化施設の整備、これを決められた時間の中で粛々とやっていかなきゃいけない。その過程の中で、やはり、もつともつとね、説明を丁寧にしていかなきゃいけないと思いますし、市議会議員の皆様方にも、そういう説明をしていただいた上でね、理解をしていただけるような、そんなワンチームでこれからもやっていければ嬉しいなというふうに思います。

【NHK】

わかりました、ありがとうございます

【司会】

他に、テレビ静岡さんですか。

【テレビ静岡】

テレビ静岡です。今の質問のお答えなんですけれども、その丁寧な質問ということで、たぶん市長、かねてから言われていると思うんですけれども、その丁寧な説明をした上で、なかなかその理解を得られていない部分っていうのがあると思うんですけれども、具体的に今後どういった丁寧な説明というのをされていこうというふうに思われていますか。

【市長】

私は市長の立場ですから、一言で言うと、総合的に、中長期的に、清水の国際海洋文化都市、住む人が安心して暮らせ、来る人がここで満足してもらえるような、世界水準のまちを作っていきたいということを、それぞれ各論を交えて丁寧に説明をしていきたいなということでもあります。例えば、高齢化の観点で言うと、自家用車、車に頼らなくても清水都心にアクセスできるような、そして、そこに行けば、生活のすべてが賄えるような、そんなコンパクトなまちづくりというのが求められている時代なんだよと。アクセルとブレーキの踏み間違いの事故が、これからますます 2025 年を経て、増えてくるといことが想定されていますので、そういう悲惨な事故を防ぐためには、そういうコンパクトな都市を作らなきゃいけないっていうのも高齢化社会に向けての一つの説明になるかと思います。また、静岡市の素晴らしさって、皆さんも転勤でいらっしゃった方もいると思いますけども、この自然環境に恵まれていることなんですね。海・川・山に恵まれているこの自然の恵みの中で、私たち、様々な産業が育ち、そして発展をしてきているわけでありまして。ただ、自然の恵みとともに発展をしてき

た静岡市ですが、自然のリスクということも片方で対応していかなければいけないということでもあります。今回の台風 19 号では川が危ないよねと言って千曲川等々の映像を見た方は安倍川大丈夫？興津川大丈夫？っていうような声もいただいております。で、3.11 の時には津波、大丈夫っていう話だったんです。あれはもうビジュアルで、理屈抜きで怖いと。だから私たちは、海の近くであっても、川縁であろうと、山の中に住んでいようと、とにかく安心な・強靱な社会インフラというものを制御していかなきゃいけない。その中で、経済の活性化も図っていかなければならない。そんな宿命の都市だろうということも、私、説明をしていかなきゃいけないなと思っています。

【テレビ静岡】

そういった説明というのをされると思うんですけども、やっぱり繰り返し言われてもですね、なかなか市民に届いていないというところでの、例えばその広報紙にもっと載せるですとか、市長自ら出向いて説明されるですとか、その辺の、その具体的に今後どういうふうに理解を求めていきたいかっというところのお考えっていうのを、教えて頂きたいと思います。

【市長】

おっしゃるとおりです。だから、もちろん直接・間接にね、その理解を求める工夫をしていきたいと思っています。私が出向いてね、あの大きさにタウンミーティングなんていうのはやりません。ただ、清水に出かける機会多いです。その時にこのことを話題にして、私自ら説明をするということをして少数の形であればあるほど、やはり理解が進みますのでね、そういう機会を積極的に持っていきなというふうに思いますし、広報しずおか、これ唯一私たちが持っている直接媒体でありますので、こここのところ、これからそのことについて特集を組んでいくということが決まっておりますので、ぜひ、広報しずおか、お読みいただきたいなということを願います。ぜひ、メディアの皆さんにも総合的、中長期的にこうなんだと。津波だけの問題ではないんだということを報道していただきたいなということを切にお願い申し上げます。

もう川も大変、山も大変、次のフェーズに、気候変動に応じて我々は対応しなきゃいけないというところには、それがやっぱり私たちの問題意識で、SDGsの目標にも地球温暖化の解決された 2030 年を目指そうということですので、まず根本的には、ここんところを環境的にどうするか、私たちが、どんなことができるか、微力ではありますが環境局中心で頑張ってる。それまでの間こういう台風や災害が来るということは、リスクとしてあるわけだから、なるべくこれは膨大な予算がかかりますけれども、海も山も川も、強靱化していかなければいけないということ尽きると思います。

ただね、予算は限りあるわけだし、国の方との調整もありますし、一朝一夕にいかないと思いますけれども、そんなフェーズになった、やっぱり防災対策をハード、ソフト面でやっていかなきゃいけないなというふうに思っています。

【司会】

朝日テレビさん。お待たせしました。

【静岡朝日テレビ】

すいません、朝日テレビです、再び。まさに進め方に問題があるということで、この川勝知事の発言に、先ほどの関連なんです、なったと思うんですけども、実際に市議会の遠藤議長がですね、この議会を侮辱されたとして、発言の撤回を求めています。

田辺市長はこの発言の撤回は求めないのか、市のリーダーとしては侮辱されたという意識は持っていないのかどうか、知事はこれを受けてですね、撤回どころではなくて、猛省してほしいと言っていますけれども、市議会含めて田辺市長は、猛省をするのか、あるいはこの発言に対してどう受け止めているのか、そこもお聞かせいただきたいと思います。

【市長】

防災対策を所管している県の職員の皆さんと、静岡市の職員は、連携をして一生懸命やっています。

で、先ほど私が申し上げました防災対策は県との連携が不可欠です。県もいろいろな課題を抱えていながら、防潮堤の問題を全県的に進めようとしておりますし、清水の防潮堤のことも、ぜひ市と県と連携をして、これからやっていかなければなりません。

なので、私からすると県市連携して、前向きに、とにかく災害に強い、そして、人々で賑わう清水都心を作っていきましょうということと呼び掛けたいと思います。

【静岡朝日テレビ】

発言の撤回は求めないということ。

【市長】

先ほど申し上げたとおりです。

【静岡朝日テレビ】

特に侮辱されたとも思っていない？

【市長】

議会は議会、議会がああいうふうにおっしゃっていただいたのでね、それを私は見守りたいと思います。私は行政の長ですのでね、やっぱり発言の重さを十分知っておりますのでね。

ぜひ、ご了解いただきたいと思います。

【静岡朝日テレビ】

一連の発言の中でですね、市議会の有力なボスがいて、その有力の、影の市長とまで言いますけれども、じゃあこの人物のあてっていうのは市長としてはあるんでしょうか。誰のことを知事は言って

いるのでしょうか。

【市長】

議会のことですので、議長さんに聞いてください。

【静岡朝日テレビ】

ありがとうございました。

【司会】

はい。第一テレビさん。

【第一テレビ】

桜えびについて質問してもよろしいでしょうか。記録的な不漁が続いている中で、廃業を考えている業者が4割ほどいるというデータも、経済研究所から出ているんですけれども、今後、市としての支援策や何か対応するお考えなどございますでしょうか。

【市長】

これも大きく言えば、地球温暖化・気候変動と密接な関係をする不漁だと思うんですね。だから、そのところ根本的な問題だと。だから本当に自然災害と同じような局面、環境的な変化による不漁だということがあるかと思えます。それほど気候変動は深刻だということでもあります。それにやっぱり対応していかなきゃいけないということで、まず、ご存知のとおり6月補正で先手を打ちました。

桜えびの経営改善・経営強化事業、この状況について、報告方々お答えをいたしますと、2本立てですね、資金調達支援と経営強化支援で事業を進めております。

9月の1日から申し込みを受け付けています。10月23日までに、ひとつ目の資金調達支援事業は、市の制度融資の一環ですけども、申込件数が14件ですね。融資申込数が一億百万円ですね。現在も受け付け中でありまして。12月の末日までであります。来年度もこの予算、今、議論しておりますけれど、編成をしたいなというふうに思っています。

ふたつ目の経営強化支援事業について、これも補助金メニューでありますけれども、今のところの申請件数は7件であります。この合計は217万円千円ですね。これも来年も継続していきたいと思っております。以上、下支えをしていきたいと思っております。

なお、今後の漁の状況や商工事業者へのヒアリングを踏まえて、さらに支援の在り方は、充実支援の在り方も、検討をしていきたいと思っております。以上です。

【司会】

よろしいですか。いかがでしょうか。最後になると思いますが。

【NHK】

すいません三度。前回の市長会見で桜ヶ丘病院について伺いましたけれども、市長その時に病院のダウンサイジングは病院が考えるべきことと。どのような病院を作っていくのか、早くビジョンを示してほしいという発言をされて、これ私そのまま放送してしまったことの反省があるんですけども、あたかもボールが桜ヶ丘病院側にあるかのような言い方に、やはりちょっと違和感を持たざるを得ないんですが、元々移転の前提として、医師確保対策を求められているのであり、それに何をしてくれるのかを市が示せない中でビジョンを示せというのも無理があるんじゃないかと思うのですが。

【市長】

お言葉を返すようですけど、それは議論があるところですよ。やはり当事者責任としてJCHOさんが、あの土地を御所望して、そして、私たちは譲ってあの土地を提供した。状況の変化は多少あると思いますけども、やはりJCHOさんが第一義的に、どんな病院をあそこに整備をするべきか、どういう医師確保策を持っているのか、いうことを示すべきであり、それについて私たちはどんな支援ができるのかということが、私は順番である。それがどうして違和感を持たれるのか、私はちょっと首をかしげざるを得ませんので、ここは記者と議論があるところだと思います。

なお、やっぱり情報の共有化は必要ですのでね、今、JCHOの尾身理事長と私は、いろいろそのあたりのところ、心合わせをしております。現場では清水桜ヶ丘病院に、この移転というミッションを受けて、三重県から赴任をしてくれた相川院長、副市長が先週、相川院長とも心合わせをしましたので、少し補足的に、その様子がどうだったかということコメントをしてもらおうというふうに思っておりますけれども、やっぱり現場同士の、やっぱり相川院長もJCHO、方針の中でやるという中で、私たちの支援ということも欲していると思いますし、やはり不安な気持ちもあろうかと思えますんでね、そういう意味で、今回、議決をいただいたから、よしやろうということの報告方々、確認方々、相川院長のところまで出向きましたので、小長谷副市長、報告をしていただきたいなど。

【小長谷副市長】

実は今回、市議会で重い議決をいただいたということで、桜ヶ丘病院にも関連する、間接的に関連をするというようなこともあったものですから、今回こういう議決をいただきましたということで相川院長の所へ、一昨日、行って参りました。

これから具体的にいろいろ病床数の話ですとか、診療科の話ですとか、いろいろ問題、課題がありますが、それについては今後とも、両者ですね連携をとって、一緒にやってみようというような話をしてきたところです。以上です。

【NHK】

今後どういう病院を作っていくかは病院側から示すと？

【小長谷副市長】

そこまで具体的にはね、ご挨拶に行ってきただけです。一緒になってやっていきましょうねと、そういう話です。

【司会】

どうもありがとうございました。

時間の方もまいりましたので、本日の定例記者会見、終了させていただきたいと思います。